

# 学生による学生のインカレ

木村佳司

インカレロング 2010 再試合

2011年2月5日 栃木県日光市

インカレロング 2010 奈良大会での競技不成立を受け、再競技が行われた。

トラブルにより奈良で出走できなかった小林遼と高野美春がともに2連覇を達成した。

## 女子学生選手権(ロング種目)

1 高野美春	1:14:33	十文字女子 4
2 新井宏美	1:15:24	新潟 4
3 水野日香里	1:18:17	榎山女学園 4
3 佐野まどか	1:18:17	東北 3
5 柴田彩名	1:22:18	榎山女学園 4
6 田代祐香里	1:22:47	日本女子 4

## 男子学生選手権(ロング種目)

1 小林 遼	1:15:23	東京 4
2 結城克哉	1:15:35	東京 2
3 山上大智	1:15:40	東京 4
4 松井健哉	1:21:09	名古屋 4
5 三谷洋介	1:23:09	東京 2
6 矢野貴裕	1:23:32	東京 4

## 奈良の続きを日光で

2010年11月のインカレロング奈良大会でシード選手となっていた高野美春と小林遼は最終ランナーとしてスタート時刻の12:15を待っていた。スタート10分前になってアクシデント発生。そのまま競技は不成立となってしまった。

その再試合をして開催された本大会で高野美春と小林遼は奈良で走れなかった悔しさを晴らすように快走し優勝した。

優勝争いは僅差の勝負となり、この大会にむけての切磋琢磨ぶりがみてとれる。男子は入賞者6名中5名が東京大学という驚くべき結果となった。また女子は新潟の新井が快走、優勝の高野まで秒差に迫る勢いだった。

## 再試合用特別地図

インカレロング再試合の会場は翌日開催されるリレー大会「山メモ」(旧関東リレー)と同じ。地図は「日光例幣使街道」を基本とし、隣接のテレイン「日光口」とを接合して大型の地図とし、ロングコースを実現した。この地図の接合にあたっては接合部分の新規調査が行われた。

## 学生自治のインカレ

今回は主として学生の手によって開催された。急遽開催することになったためである。また開催にあたっては、奈良大会で不成立となった選手権クラスだけが行われた。学生の手による学生のインカレだった。

「学生選手権者を決めるということはどういうことか？誰が何のためにそれを行うのか？」今回の再試合はこれを考える機会になっただろう。

## インカレのその先へ

確かに学生による学生のためのインカレロングは終わり、選手権者を決めることができた。だがさすがに学生たちはインカレロングを運営することで精いっぱい。外部への情報発信やインカレロングの後はあまり考えられない状態だ。このような素晴らしい取り組みをなるべく取り上げてご報告したかったのだが、筆者・木村はこの再競技に行くことができなかった。アジア冬季大会のリレー会場から遠く日本での成功を願っていた。

最後に今回の実行委員長となり再競技に尽力した山川氏の挨拶をここに掲載する。

(木村佳司)

## 再競技実行委員長のあいさつ

山川克則

私のインカレへの関わりは大学2年の22歳の時から52歳の今まですでに31年もの期間になっています。その間不成立を間際で食い止めたことは何度かありました。今回のように地元の方からの申出などです。長くやっているところということもいつかはあるのだろうな、と思っていました。

出走できなかった選手もそれは悔しかったでしょうが、あの急斜面をあれだけの地図・コースに仕上げた苦労の最前線に立った者として、私にとってもそれはそれは悔しいものでした。2年間かけてずっと準備に奔走してきた大阪オリエンテリングクラブや関西学生OBの皆さんも勿論同じ気持ちでしょう。

思えば私のインカレへの関わりも、インカレが開催されないかもしれない、というところから始まりました。今回

の再競技開催の議論では、あの時さんざん議論した“学生主体のインカレ”を思い起こさせるものがありました。学生の議論の中でも3割5分ほどは再競技には反対で、涉外問題での不成立はそのことをそのまま受け入れよう、というものだったと聞いております。その上で組織として学連が再競技を開催すると決定したのは、インカレへの色んな人の(悔しい)思いが結集したものであり、決定したからにはフルタイムのオリエンテリング事業者として私にしかできないことは力を尽くそうというスタンスで準備に関わることにしました。代替手段ではありますが、精一杯インカレらしいものを提供していきたいと思います。

競技する選手の皆さんも色々な思いをいだいてこの大会に参加することでしょう。11月の試合のように万全の準備でこの試合に臨めない人も多いことは重々承知しています。前日満身に寝られずに参加する方も、例年のここで開催する学連合宿の参加の仕方を見ているから判ります。

しかし、開催すると学連全体で決めたからには、その瞬間だけは“ガチ”の勝負をしましょう。代々引き継いでいけるインカレに向かうモチベーションをしっかりと後輩に見せましょう。そしてミドル&リレーへの準備もしっかりとやりましょう。

また選手権のみの再レースですから、今回は準備のいろいろな場面で現役学生が参画し、主体的に運営しています。演出も財務も学生で取り仕切っています。参加者にも負担を多くはかけられないという面から参加費を設定しましたが、それでも“インカレ”として準備していく上で欠かせないことを行っていくと、今の学連の状況では参加者(加盟員)増やさないことには、相当キツイことを実際に体験・感受できる貴重な機会となっています。

インカレの魅力を失うことなく、今後どのように持続可能なシステムを築き上げていけるのか、ここをきっかけにインカレ立ち上げ当初からの理念である“学生主体”のあり方を、今一度考えていただきたく、私の挨拶とします。

(実行委員長 山川克則)